

若連中

藩政時代から村の部落単位に若者を「若連中」・「若い衆」とよぶ組織があつた。十五歳から三十歳までの青年が加入し、成人として必要ないろいろな訓練をうけた。「若連中」は農事・祭礼・獅子舞・報恩講・消防などの行事を担っていた。

明治になつても村の活動には大きな変化はなかつた。しかし明治政府は二十一年に市・町村制の施行に伴い一町村内に目的は同じくするが、村々で若連中が割拠するのは自治制上障害があるとして、南山田村青年会・南山田青年団へと統合しようとした。

しかし村落共同体の自然発生を基礎とした若連中や若い衆を行政村を単位とする青年会に統合するには困難があつた。青年団という名称は大正四年後に一般に用いられるようになった。

国策の通俗教育上としての青年団は、明治後期から大正期にかけて全国に組織された。そして軍事訓練や戦時出征軍人家族への慰問・農事奉仕な

どの役割を果たすのであつたが、村落共同体の若い衆の金戸青年会は、成人訓練機関として昔のまま残り現在に至っている。

日本帝国の前途を憂慮して国民の中堅にして次世代を担う青年の修養を旨とする目的で、大正二年八月に南山田青年団が創設されるのが、その初代団長は中川尚三であつた。三代団長は中川孝久（大正十年）、五代は松田光一、六代は松田孝道と続き、大正年代の南山田青年団活動の指導的活躍をしたのが金戸の若者であつた。

青年会の意義

金戸の「協議録」では、昭和十年「青年会へハ本年五円ノ補助ヲナスコト」とあるのが最初である。戦後の昭和二十一年頃の補助金は金壹百円であつた。昭和五十年頃は一五〇〇〇円、平成二十一年頃は五〇〇〇〇円となつて

いる。戦後は戦場や徴用先から帰郷し、荒廃した金戸の復興に若い活力が何よりも期待される存在であつた。青年会は食糧増産の農事に取組むと共に、村人の中心となり映画鑑賞会・民謡教室・素人演芸などを行った。農村経済が安定し時代が変わつても、若い衆の親睦

のほかに昭和五十五年の宮塚久一町議選挙の支援、昭和五十六年からの左義長の復活、運動会開催など地区行事の要として直面する問題に積極的に関わつてきた。青年会員数が減少した昭和五十九年度からは三十五歳から四十二歳までと会則を変更して守

っている。団地造成以後も新しい会員が参加し、左義長・年末警戒・春秋祭礼の官掃除・地区の親睦行事などに欠かれない活動をしている。

青年会の事業

昭和三十年に「金戸青年会々々則」が制定されたと推測されるが、会則第二条には「本會は青年団の團結を図り、教養の向上にとつめ以て農村の文化に寄與することを目的とす」とし「金戸居住の十七才以上三十五才迄の者を以て組織」する。年間行事として「農業・文化事業・公益作業・体育奨励



・娯楽修養会・その他レクリエーション」を予定すとある。

事業の第一に農業経済とあるは、青年会の農事に果たす役割が大きかったことを示している。農事は「農事講座」や「苗代防除」があるが、「苗代防除補助金」が青年会への一〇〇〇円の補助金よりも三二五〇円の高い補助金を受けているので、現在の共同防除を青年会が担っていたのである。昭和四十二年頃からは農事の事業がないので、防除は実行組合（生産組合）への仕事に変わっていったのであろうか。

文化事業は祭礼行事の余興として民謡や演芸を行っていた。大正から昭和初期の古老の話に、村の若い衆は社寺の祭りや仏事に度々素人芝居を演じていたという。その舞台の幕が現在も残っている。「協議録」にも昭和二十一年初寄会に「素人演芸二関スル件。補助金参百円申出ノ為隣村ヲ聞キ適當ニ取計方幹部一任」とあり、戦後の近隣集落では演芸が盛んであった。二十四年の初寄会では「青年団演芸会補助金一千円支給スル」とある。三十年には謡曲講習費・小謡曲の練習が事業にあり、祭礼余興としての民謡踊りが婦人会と協力して三十二年まで行われていた。翌三十三年の祭礼余興は野田青年団と協力して南山田小学校で映画が開

催された。

公益作業は、神明社や専徳寺の雪囲や掃除がある。また十二月三十・三十一日両日に年末警戒を行っていた。警戒の合間に麻雀や花札をしながら成人としての訓練を受けたものだという。体育奨励は長い期間ボーリング大会があるが、昭和五十八年南山田地区運動会へと発展する金戸運動会がある。

昭和五十二年度（会長江大作）青年会が金戸地区運動会を計画し、川田ニツトのグラウンドで実施した。翌昭和五三年（会長盛田正則）からはお盆の一五日に第二回の運動会を農協会館が建設される空き地で実施した。金戸地区単独での運動会に触発されて是安地区なども開催するようになった。

レクリエーションとしては昭和四十二年に「太美山荘」に行き刀利ダムへの散策が初めであろうか。昭和四十三年には上高地・乗鞍岳に一泊二日の旅行を実施している。以後能登・飛騨・名古屋の各地へ出かけている。

青年会物故者

年末の若衆報恩講で先輩青年会の物故者追悼会を続けているが、会員は戦死を含めても大正五年からの九十五年間に十三人の物故者がある。昭和三十

五年の中仙道恒雄氏以後は五十年間ひとりの会員も亡くなっていない。

盛田篠次郎	大5	宮塚長一郎	大13
中仙道弥一	大13	江清一郎	大14
乗松彦次郎	大14	中仙道市蔵	大14
松田政次郎	昭4	東頭三吉	昭7
中仙道政夫	昭19	朝日清八	昭9
松田外喜雄	昭25	朝日正利	昭35
中仙道恒雄	昭35		

平成の青年会

会員減少するなかで若連中時代から青年会員だけによる報恩講が続けられており、年末警戒も地区の安全を守るために行っている。子供の行事である左義長の準備・後片付けも続けているが、左義長などに勧誘しても会員とならない青年会の子供達も多く参加している現実を思うに村落共同帯の欠如していることを嘆かざるをえない。また夏祭りなどの行事を各種団体で運営する中でも客人のように参加する人が余りにも多くいることに落胆さざるをえないものがある。

その中でも新しい青年も数人が参加してくれていることに一筋の希望を感じずる。やがて巣立っていく子供達への原風景を育むことの大切さを認識しないのは如何なものか。